

西川津遺跡の出土品を「再発掘」してみた

西川津遺跡宮尾坪内地区（松江市）

発掘調査年：1980・1981（昭和 55・56）年

深田 浩

島根県埋蔵文化財調査センターは平成 4 年に開設され、来年度で 30 周年を迎えます。これまで、県内の埋蔵文化財の調査研究拠点として、数多くの発掘調査を行ってきました。

現在、センターに収蔵されている出土遺物の総計は、コンテナ箱でなんと約 33,000 箱を数えます。このような膨大な数の出土品は、遺跡からセンターに持ち帰った後の整理作業で、大まかに発掘調査報告書に掲載される資料（掲載品）と、掲載されない資料（非掲載品）に分類されます。掲載品に関しては、報告書の記載に基づいて整理・収納し、資料調査や貸出対応など、出土品としての活用が図られています。ただし、掲載品はコンテナ数で約 9,000 箱に過ぎず、残りの 7 割に及ぶ非掲載品に関しては、収蔵されたままの状態と言わざるを得ません。こうした中、センターではこのような非掲載品の新たな公開・活用を図るため、コンテナに収納された全ての遺物について、細片 1 点に至るまでその種類や時期を分類・計測し、重要遺物の再確認などデータベース化を行う出土品の再整理事業に着手しました。平成 29 年度からは、西川津遺跡出土品の再整理に取り組んでいます。

さて、西川津遺跡は松江市北部の朝酌川流域に広がり、昭和 50 年代から平成 20 年代にかけて発掘調査が行われました。遺跡からは土笛や貝輪、銅鐸、多数の木製品が出土するなど、まさに山陰地方を代表する弥生時代の大規模拠点集落として、全国的にも知られています。コンテナ数約 3,000 箱に及ぶ膨大な遺物量に圧倒されましたが、まずは総数が 170 箱程度の昭和 55・56 年度に調査された宮尾坪内地区出土品から作業を行いました。

その結果、遺物出土量の推移から遺跡の動態を検証することが可能となりました。遺物量は弥生時代前期後半にピークを示しますが、中期の終わり頃に急激に減少し、後期はさらに低調にな

る様子が明らかとなりました。すなわち、西川津遺跡の拠点集落は前期後半が最盛期で、中期末には衰退し、後期にかけて解体していく可能性が見えてきたといえます。

この現象が何を意味するかは、今後の山陰地方の弥生時代研究の場で検討していく課題といえます。また、西川津遺跡の他地区の再整理も進め、引き続き拠点集落としての具体像を検証していく必要もあります。まさに宝の山ともいえる、出土品が保管された収蔵庫の「再発掘」プロジェクトが進行中です。

(島根県埋蔵文化財調査センター管理課長)



再整理作業が進む西川津遺跡出土品

(全部終わるのはいつの日か…)

【ひとくち情報】

西川津遺跡出土品の再整理成果を報告する講座が松江市打出町の埋蔵文化財調査センターで開催された。講座の様子は島根県公式 YouTube チャンネルで公開中

